

# 新 歌人群像

# 浜田 到

〈母〉を求めて

伊藤一彦

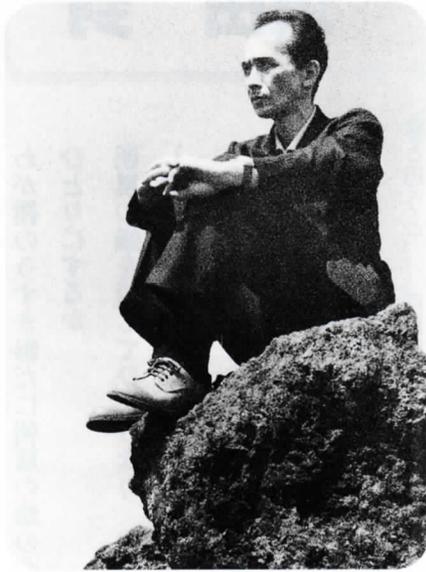


## 崖の歌

崖を愛する人はどんな人だろうか。四十九歳の時に突然の事故死でこの世から消えた浜田到には崖の歌が少なくない。死後出版の唯一の歌集『架橋』（昭和四十四年）から二首引いてみる。

ぼろぼろと崖立ちながらときおりは赤ら引く雲が一散によぎる  
夜の色は天の高さをはみ出でてはたはたと崖が鳴りいたりけり

「円の影」の一連の中にある。一首目、「ぼろぼろと」とあるので、崩れかかっている崖である。危なくて何も近づかないかと思っていたら、明るく赤い雲がめずらしく近づきかけたが、一目散に逃げてしまった、と。二首目はその崖が鳴っているというのである。風が激しくぶつかって土を崩しているのだろうか。鳥も来ず、雲も逃げた。身を崩す風といえ、烈風を崖はよろこんでいるようでもある。上の句がまた不思議な印象だが、作者が「天の高さ」をはみ出したさらに高いところを思い描いていることは間違いない。崖はじつは「天の高さ」をはみ出したところに向けて鳴



『浜田到歌集』の口絵写真

っているのではあるまいか。

「架橋」には「神の果実」というエッセイが付されている。エッセイと言うより、アフリズムと言ったほうがふさわしいかもしれない。その中に次のような一章がある。

崖の美しさは、そこから先もはや眼に見えない架橋を予感せずに居られぬ、空間のもつ暈ゆまいの美しさである。丁度経験の果てまで行き尽した言葉のように。

崖とは「行き尽した」高み、しかもなお「そこから先もはや眼に見えない架橋」を予感する場所、だという。暈ゆまいは下方を見てのものではなく、より上方を仰いでのもの。

浜田到はそんな崖の上に身を置こうとした人だったのではないかと思う。「現代歌人文

庫」(国文社)の一冊の『浜田到歌集』(昭和五十五年)の口絵の写真が忘れがたい。どこで撮られた写真か知らないが、崖の岩の上に坐って彼方を見つめている一枚である。

### 境涯を語らず

浜田到の作風はしばしば抽象的であり、その実人生もあまり知られていない。彼が境涯を語ろうとしなかったからである。そして、鹿児島県に住み他の歌人たちと会おうとしなかったからである。

彼の良き理解者で同人誌「極」の仲間だった塚本邦雄にすら会うことを断ったというエピソードは有名である。「ぼくは同人誌『極』についての通信の中に、『九州へ旅することがあったら会いたい』との一行を添えた。私信のたぐいを殆どくれたことがなく、くれたとしても忘れた頃の返信のみであった彼が、この時だけ、うてばひびくようにこたえた。『決して訪ねてくれるな。私に会おうとなど思ってくれるな。これは私の切なる希ねがいである。』と塚本邦雄は記している(『詩の死』昭和四十三年十月)。

浜田到は大正七(一九一八)年、アメリカのカリフォルニア州で生まれた。両親がロシア

ンゼルスで農園を営んでいたからである。四歳の時に両親と鹿児島県国分市に帰省したが、両親は再び渡米し、到は母方の祖母の家で育てられた。十一歳の時に病気のため母が帰国、だが翌年には死亡した。歌集『架橋』の巻末の年譜から幼少期の右の事項を書き移しながら、到にとつての故郷はロサンゼルスだったのだろうか、それとも鹿児島と思えていただろうか考える。また、母とは生まれてからは四歳まで一緒、その後太平洋をはさんで離れて住むことになり、やがて再会した母は間もなく病死。言うまでもなく幼少期の人間にとつて故郷と母親が与える影響は重要である。故郷も母親も自己を受容してくれる存在として人間形成に大きく働くからである。したがって幼少期の不安定に過ぎた浜田到の孤独感について思いをめぐらさずにはいられない。

到は昭和十(一九三五)年、十七歳の時に作歌を始める。鹿児島県立一中の四年生で、一中に「潮音」の歌人安田尚義なおよしが教鞭を執っていた。その安田が鹿児島で主宰する「山茶花さざんか」に作品を発表するようになる。「架橋」は逆年順の構成で、歌集の後ろのほうにその時の作品が出ている。「由緒」の冒頭の歌である。

# 到 浜田

新 歌 人 群 像

わが指のうすき影だに朝風の蟻の心を  
ひとりにするか

朝風の蟻を殺してひとりなり よこれ  
し空の下に目をとず

十七歳でこれだけ完成度の高い歌をうたった浜田到に驚く。一首目、さわやかな朝の土を歩む蟻の上に手をかざして影をつくっている。一匹の蟻の孤独感に親近感を抱いたのかなと思うと、二首目ではその蟻を殺した歌になっている。蟻に対する愛憎がふかぶかと表現されている。この蟻はもうひとりの自分だったのだろうか。

## 孤独なたましい

到は県立一中を卒業すると、兵庫県の姫路



富子夫人と

高校に入学、そして太平洋戦争の始まった年の昭和十六（一九四一）年に岡山医科大学に二十三歳で入学する。そして、翌年には十代の終わりから知っていた広瀬富子と結婚する。学生結婚ということになる。

妻が手の炭屑にまみれ荒れながら湖に  
明るき日和つづけり

心昏むまひるをおれば妻が手に青き木  
の芽の握られにけり

年わかく妻に倚りにし幸いの由緒は杏  
く雪ふりてやまず

結婚から間もない時期の「由緒」の一連から引いた。どの歌にも明るさが灯っている。

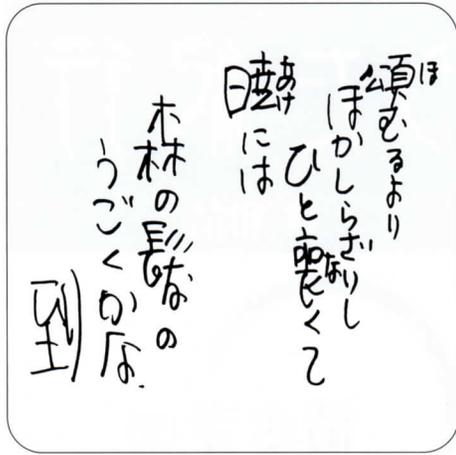
「年わかく妻に倚りにし幸い」が静かに深く滲み出ている。どのような経緯があつて若くして結婚したのか私は知らないが、想像できることは故郷や母親に代わる「母性」を強く求めていたのではないかということである。全面的に自己を受容してくれるそのような女性に到は出会い、結ばれることができたのだ。ところが、悲劇が起こる。現実には事件が起きたのではない。到の心の中で起こったのである。前述の『浜田到歌集』には「岡山日記」という、結婚直後二か月間の到の貴重な日記

を収めている。「昔を想へば、今は楽しい」「あなたは、今迄誰もがしてくれなかったことのない様な愛し方で私を愛してくれる」といった幸福感あふれる言葉が並ぶ。だが、結婚して一か月ほどたった日の日記（昭和十七年十二月二十三日）で到は孤独のどん底に突き落とされる。きっかけは妻にその母親から速達が届いて、母の愛情に妻が泣いたことである。常識的に考えれば、妻とその母が深く愛情に結ばれている、感動的で好ましい場面であろう。しかし、到は違っていた。「うつくしく永い愛のしらべが、あなた方母子の心の中で鳴りひびいてるのであらう。私はそのしらべを知らない」「私はいつもこの世の隅ツコで母と語ってきた。あなたの泣声をきいて、私もいちはやく、心の中に母の在処をさがしてみた。居るには居た。だが居ないに等しいのだ——あなた方の、生きてる母上に比べれば。結局、私は孤独である。あなたさへ、私からとほくとほく離れた国の住人だ」。妻を誰が責めることができようか。妻に愛情で結ばれた母がいるのは当然ではないか。その当然のことすら衝撃的に受け取らざるを得ない〈母無し子〉の到がいた。「詩ふことによつて生きんとすることは、母を持ちたいと希ふ私の必死の努力であつた。あなたを得て、私の

そのかなしみは満たされてゐた。詩はずとも充分の幸福だった。だが、あなたの心を占めてゐる母上の場の広さ」とさらにこの日の日記は続く。浜田到の心の奥深くを率直に語った、そして到作品を理解する重要な鍵がここにある。

## 医業のかたわら作歌

さて、戦後は鹿児島県に帰り、内科医として仕事に励むかたわら、地元の歌仲間である東田喜隆、岡元健一郎、宮原正徳などと同人誌「花宴」を創刊する。昭和二十四（一九四九）年のことで、到が三十一歳の時だった。



到自筆の歌（歌集『架橋』の口絵より）

しかし、「花宴」は二巻四号で翌年には終刊する。この時代の到について知ることは前記の「花宴」のメンバーの語った座談会「浜田到を語る」（昭和六十二年十月「南日本短歌」第二号）が貴重である。一方、昭和二十四年には東京を発行所とする、岡部桂一郎、山崎方代、笠原伸夫などの同人誌「工人」に参加して作品を発表する。「詩ふことによつて生きんとする」「必死の努力」を医業のかたわら続けていたのである。

総合誌の初登場は昭和二十六（一九五二）年の「短歌研究」八月号である。モダニズム短歌特集に塚本邦雄などとともに「微光する夜に」十首を発表した。しかし、総合誌に盛んに作品を発表するようになるのは周知のように昭和三十四（一九五九）年である。「短歌」の編集者であった中井英夫のところに到から「五百余首のノート」が送られてきて、中井英夫が構成して発表したのが「架橋」六十首（「短歌」昭和三十四年六月）、「硝子街」三十首（同八月）、「臉」三十首（同十月）である。人口に膾炙した到の代表歌はほとんどここに収められている。中井英夫との出会いの幸福を思うが、中井は「これらの作を得て、私はようやく戦後短歌の、必要ではあつたけれども一つの間違った方向、すなわち

『意味の追求』から短歌が解放されたのを感じた」と書いている（『黒衣の短歌史』）。

孤り聴く〈北〉てふ言葉としつきの繁

みの中に母のごとしも

「架橋」

汝が脈にわが脈まじり搏つことも我れの死後にてあらむか妻よ

「硝子街」

頰むるよりほか知らざりしひと喪くて  
暁には森の髪うごくかな

「臉」

〈母〉を持たず喪くしたままだった浜田到は、死後こそ妻の魂と一つになることを願いつつ、この世では日々崖のいただきにあって言葉の〈極北〉を〈母〉として歌い続けたのだったと思う。次のような、「意味の追求」を許さない、それでいて鮮明なイメージが強くわれわれに働きかけてくる作品を幾つも残している。

ふとわれの掌さへとり落す如き夕刻に  
高き架橋をわたりはじめぬ

硝子街に睫毛睫毛のまばたけりこのま  
まにして霜は降りこよ

耳と夕焼わが内部にて相寄りつしづか  
に鱈ふるこの空尽きず

（いとう・かずひこ「心の花」選者）